



ちっちゃい  
アイドル

クエスト!

アイドルの  
ちっちゃい  
部屋

体験版

# もくじ

|       |       |    |
|-------|-------|----|
| ■ 第一章 | ..... | 3  |
| ■ 第四章 | ..... | 22 |

## ■第一章

「ふえええんっ！　こんなに小さくなってダメダメな私は、穴掘って埋まってますぅ〜！」

夕方。いつものように<sup>765</sup>プロの事務所に帰ってくると、ショートカットで白いワンピースを着た小さな女の子が、泣きながら穴を掘っていた。

はて？　ウチに亜美真美よりも小さなアイドルが居ただろうか？　それとも社長がまたスカウトしてきたのかな？　あんなに泣いちゃって…。親や担当のヤツは何をやっているんだ？　一人にしたら可哀想だろうに…。

3

それよりも、レッスンが終わって先に事務所へ戻った雪歩はどこへ行ったんだろう？　まだこの後、ミーティングがあるから事務所で待っているように言っておいたのだが…。俺はキヨロキヨロと辺りを見回すが、雪歩らしき人影は見つからなかった。

「おい、雪歩ー！　ミーティング始めるぞー！　どこ行ったんだ〜？」

「うう〜、プロデューサーっ！　私ならさっきからここにいますぅ〜！」

さっきの泣いている女の子が俺の側にやってきて、そう言った。んん？ プロデューサー？ 俺が？ 君の？

「お…おいしい、ちょっと待ってくれ！ 俺が担当しているアイドルは、萩原雪歩って言って、君よりももう少し大きくて、白いワンピースを着ていて、ショートカットがかわいくて、『穴掘って埋まっますう〜！』とか言って、泣きながら穴を掘るヤツなんだぞ？」

「うう…、大きさ以外は…全て条件を満たしてますう…」

「あっ、本当だ！」

確かに大きさ以外は雪歩の条件にぴったりマッチしていた。い、いや、待ってくれ。いくら雪歩が「ひんそーで、ちんちくりん」とか言っているからと言って、ここまで見事な『ロリ』になってしまっうなんてありえないだろ、常識的に考えて…。

ひよっとしてこれが噂に聞く『減衰』？ いやいや、人間がここまでロリ化するなんて聞いたことがない。さっきまで158センチあった娘が、ほんの数時間目を離れただけで、20センチ以上小さくなっってしまうなんて…。

「き、君は…本当に雪歩…なのか？」

「そうですよお…。気がついたら…こんなに身体が縮ん

でいて…くすんっ…」

この声に、この口癖…。確かに雪歩に似ているが…。まだ『ドッキリ！』の可能性が消えたワケじゃない！テレビの業界にいるとたまにそういった罠がある。

俺はこの前、亜美真美のやっていたバラエティー番組で騙されたばかりで、疑心暗鬼になっていたのだ。

「じゃあ、自称・雪歩と名乗る少女よ！ プロデューサーである俺の「名前」と自分の「ユニット名」を言うのだ！ 本物の雪歩ならばこれくらい答えられるはずだ」

「えっと、プロデューサーの名前は『茅野文哉（ちのふみや）』で、ユニット名は『Snow Walk（スノーウォーク）』ですっ」

「では第二問。雪歩の学校の靴箱にラブレターを入れたその送り手のイニシャルは？」

「HRですっ」

「お前を試すようなことをして悪かったな、雪歩。お前は間違えなく真正銘の萩原雪歩だ。しかし、どうしてこんなことに？」

「わ、私にもよくわからないんです…。小鳥さんの席で、このお茶を飲んでいたら、いつの間にかこの姿に…」

雪歩はそう言って、俺に湯飲みを見せてくれた。いつ

も雪歩が事務所で使っている、何の変哲もないマイ湯飲みだ。

ん？

小鳥さんの席？

「おい、雪歩……。なんで小鳥さんの席で？」

俺がそう雪歩に聞くのと同時に、事務所の入り口辺りから甲高い悲鳴が聞こえてきた。悲鳴が聞こえた方へ振り向くと、そこには力無く床にぺたん座りしている女性事務員の姿があった。噂をしていた音無小鳥、その人である。

「こ、小鳥さん！ ど、どうしたんですか!? そんなに大きな声で……」

「そ、その薬……。いえ、その湯飲みに入ってモノを飲んでしまったの!?!」

小鳥さんは信じられないモノを見るような目で、チビ雪歩が持っている湯飲みを見ていた。

「は、はい……。そうしたら、この姿に……」

「NO————っ!!」

小鳥さんはロリ雪歩からの告白を聞くやいなや、両手で頭を抱えながら号泣した。その表情には「絶望」の2文字が相応しかった。いつも笑顔でみんなの世話を焼いていた、あの音無小鳥の面影は、どこにも残っていないかった…。

「わ、私のボーナスが…。ブランドモノのバッグも…PS3も…全て諦めて買った…私の薬が…」

く、薬って…？ この湯飲みに入っていた飲み物は、薬だったと言うのか？ そう小鳥さんに聞いたただそうとする前に「ガクリ…」と言う書き文字が出てもおかしくないような勢いで、前のめりになって倒れた…。

俺と雪歩は気絶した小鳥さんを二人で抱きかかえて、事務所の奥にある来客用ソファへ運び、看病した。

雪歩が水で濡らしたタオルを小鳥さんの額に乗せ、俺が毛布をかけてあげると、暫くして目を覚ます。

雪歩からお茶を受け取り、ゆっくりとそれを飲むと次第に落ち着きを取り戻し、少しずつ今回の事件のあらましを語り始めた…。

「あれは3日前のことでした…。私が日課のWebサイト

巡回をしていると、『若返りの薬』の記事を見つけたんです。私も最初は『若返りの薬なんて、そんなモノあるはずがない…』と思っていたのですが、ある動画サイトを見て、考えを改めました。まずはこれを観てください…」

小鳥さんはそう言ってパソコンを操作して、Webブラウザを起動し、ブックマークから『ニゴニゴ動画』という動画サイトを表示した。

「こ、これは…っ！」

俺と雪歩はその動画を観て驚愕した。ある白髪の老女が、次第に若返っていき、皺も白髪もなくなり、二十代ぐらいの若くてキレイなお姉さんに変身してしまったのだ！

「こんなの…また誰かが上手いこと編集したんじゃないんですか？」

俺は信じられなくて、悪戯の可能性を考え、そう言った。

「私も最初はそう思っていたのですが、大型掲示板のスレを検索してみたら、すぐにこの動画についてのスレが



見つかりまして読んでみたんです」

「それで、どうだったんですか？」

「怪しいところが、全く見つからないんですよ…。編集した形跡とか…」

「それってつまり…」

「そう、本物ってことです…」

ざわ…

ざわっ…ざわっ…

事務所内の空気が変わった。

「それで私も試してみたくなってしまっ…。女の子にとって、美容と若さは永遠のテーマと申しますか、不可抗力っていうか、みたいな？」

小鳥さんは頬を赤らめながら、そんなことを言う。そう言えば小鳥さんは「二十チヨメチヨメ歳」で、心ない人からは「後無小鳥」などと呼ばれていて、年齢がコンプレックスになっていたのかもしれない…。そんな彼女がこの『若返りの薬』を買い、さりげなく自分のことを「女の子」などと口走ったことを誰が責められようか？

「それで今日、その薬がここに届いたので、早速飲もう

としたのですが…。興奮しすぎて私のピヨちゃんマグカップを床に落として割ってしまったんです…」

小鳥さんが買ったこの薬は、葛根湯のようなお湯に溶かして飲むタイプの薬で、そのお湯を入れる為のコップが必要だったらしい…。

「それで…給湯室に雪歩ちゃんの湯飲みがあったから、後で洗って元に戻しておけば大丈夫かな？と思って…つい…」

「それで私の湯飲みはその薬を…」

「ええ…ゴメンなさい…雪歩ちゃん…」

そう言って申し訳なさそうに頭を下げる小鳥さん。

「そ、そんな…。頭を上げてくださいっ、小鳥さん！わ、私も！私も迂闊だったんですっ！」

雪歩は慌てて両手を振り、小鳥さんの頭を上げてもらうよう説得する。

「そう言えば、どうしてその薬を雪歩が飲んでしまったんだ？」

「うじゅじゅ…。そ、それは…。その薬を雪歩ちゃんの湯飲みに入れた直後、社長からの電話があつて…。大事な書類を忘れたから届けてくれて言われて…。それで私は湯飲みを自分の机の上に置いてから、社長がいる取引先の会社へ書類を届けに行ったんです…」

そして次は雪歩がゆっくりと語り出す。

「小鳥さんが走って事務所を出て行った後、レッスンから帰ってきた私が入れ替わりに事務所に戻ってきたんです…。それで小鳥さんの机の上に私の湯飲みがあつたのを見つけて、ひよっとしたらレッスンから帰ってきた私の為に、小鳥さんが気を利かせて飲み物を用意してくれたのかも！? とはい込んでしまい…。それで…。うう…。」

「飲んでしまったワケだ…。」

「はい…。こんな迂闊でダメダメな私は、穴掘って埋まっていますう！」

雪歩はそう泣きながら言うと、いつものようにどこからかスコップを取り出して、穴を掘り始める。

「ああ！ ダメよ雪歩ちゃん！ 下の階には別の会社が入ってるんだから、ご迷惑になるわっ！」

そういう問題ではないが、掘っておくとブラジルまで掘り抜いてしまいかねないので、俺も小鳥さんと一緒になって雪歩を引き留めた。

「なるほど…。よくわかりました。つまり、小鳥さんがネット通販で買った『若返りの薬』が、手違いで雪歩が飲んでしまい、雪歩が更に若返ってしまったってロリになってしまった。こういうことですね？」

「はい…」

「そうですね…」

二人は項垂れながら小さく頷いた。やれやれ…。この前は『大耳』になったと思ったら、今度は『ロリ化』か…。雪歩は『名探偵バーロー』並に事件に巻き込まれやすいようだな…。

俺は痛む頭を右手で押さえながら、善後策を考えてみる。いつまでも落ち込んでいられないからな…。こういう超展開にはもう慣れてきてしまった…。

その後、小鳥さんは薬を購入したネットショップに連絡を取り、『元に戻る方法』を調べてもらうことになった。

電話でのサポートは午後の時までだったらしく、メールサポートに連絡することになった。メールの返信は「3営業日以内」とのこととで、早くても明日以降になるだろう。つまり、その返信が届くまでの間、雪歩はロリのままだということが決定したのだ…。

「じゃあ、ここにずっと居ても仕方ないから帰るか雪歩。今回も非常時だし、また社長に言って765号を借りるから、それで送るよ」

「それがその…プロデューサー…」

俺がそう言って雪歩に帰宅を促すが、雪歩はもじもじとして何か言いたげにしていた。

13

「どうしたんだ、トイレか？」

「ち、違いますよお！ そうじゃなくて…小さくなってしまったから服がブカブカで…。ワンピースだから、もし外で脱げてしまったらと思うと…」

言われてみれば確かに服がぶかぶかで、ロリ雪歩は動きすらそうにしていた。

「雪歩は前に『小さい頃の服が着れました』というメールをくれたことがあったよな？」

「はい…あの時の服は着れたのですが、逆になってみるとダメダメでした…」

「まあ、小さい頃の服の方が大きめだったのかもしいないな…。雪歩もちゃんと成長していたっていう裏付けになったじゃないか」

「うう…それは良いですけど、このままじゃ帰れません…。下着のサイズも違いますう…」

ふむ。それはつまり、もう少し待っていれば雪歩のパンティーがずり落ちてきて、ノーパン雪歩のスカートをめくることが可能になるワケだ！

しかし、そんなことをしていたら、いつまで経っても雪歩が家に帰れないからな。仕方がない。あの服を貸すことにするか…。

「よし、それなら今から衣装室へ行こう。小さい子が着れる服もあったハズだ」

「は、はい」

俺と雪歩はそう言って<sup>765</sup>プロの衣装室兼更衣室へ移動する。

衣装室内は大きなパイプハンガーが部屋いっぱいに並んでいて、そこに多くの衣装がかけられていた。

俺はその中からいくつかのアイドル衣装を取り出してき

た。

「小さいサイズのは…これと…これと…これとお…これだな。さあ、雪歩。どれがいい？」

「こ、これは…っ！」

俺が差し出した衣装を見た雪歩は驚愕した。それもそのハズ。衣装のラインナップが『ブルマ』、『スク水』、『スモック』、『赤ちゃんセット』、『メルヘンメイド』と、どれもこれもマニア向けなコスプレ衣装ばかり…。そりゃ、雪歩だってどん引きするわ…。

「まあ、なんだ…。ここはアイドル事務所だから、そういう衣装が増えるのは仕方がないっていうか…。あと、小さいサイズのアイドル衣装と言えば、これしかなかったんだ。我慢してくれ…」

「は、はい…」

雪歩は自分の身に降りかかった不幸を呪うように、落ち込みながら不承不承うなずいた。それでまあ、雪歩は結局あの中で一番マシそうな『ブルマ』を穿いて帰ることになった。

「あ、あのお…。どうでしょうか？ プロデューサー」

更衣室から出てきた雪歩は、テレくさそうにしながら、そう聞いてくる。

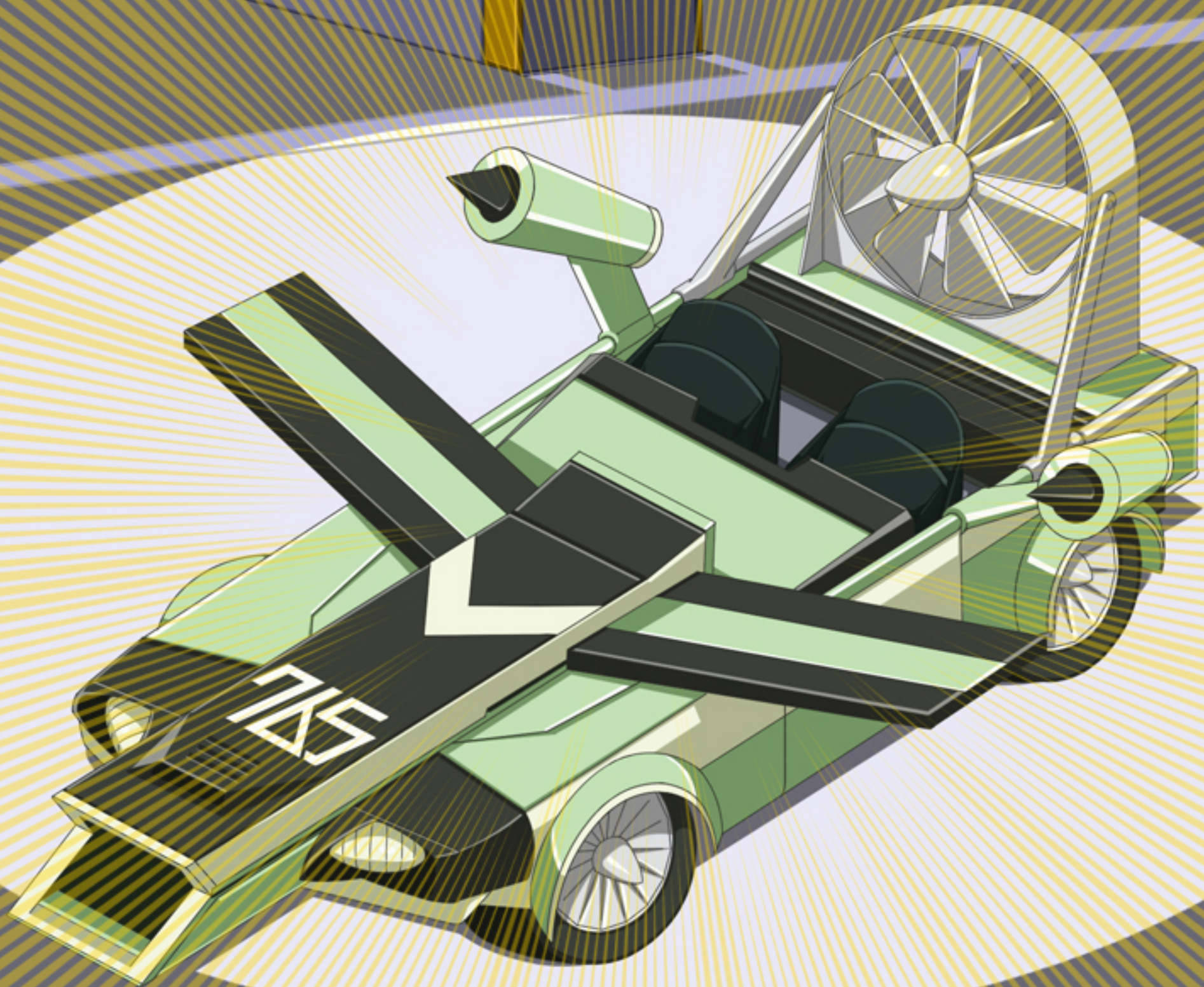
「おおっ、サイズもぴったりじゃないか。かわいいよ」「えへへ、本当ですか？ 体操服なら学校帰りという設定にすれば少しは自然になると思って…」

「よし、それじゃ帰るか。あまり遅くなると親御さんも心配するしな」

「はい」

その後、俺達は社長から『765号』のキーを借りて、地下駐車場へ行く。ちなみに『765号』っていうのは社長の愛車のことで、車内に入ると見たことのない機械類をたくさん装備しているSF風な自動車だ。音声認識用のマイクに目的地を言えば、自動運転が可能な優れものだし、『ターボスイッチ』を押せば時速350キロまで出るし、『ジャンプスイッチ』もついてるし、765号の装甲は対戦車ロケットごときではビクともしない。そして「フライトスイッチ、オン！」で空をも飛ぶ。もはや、自動車のカテゴリーなのかも疑わしい存在だ。過去に美希がこの車に乗って、トラウマになるほどの恐怖を味わったこともある…。





この前の『いぬみみ事件』の時に俺と雪歩は初めてコイツに乗り、それ以来結構お世話になっていた。

「ちゃんとシートベルトつけるよ。ヘタするとチャイルドシートが必要になるかもしれないんだから」

「そ、そこまで小さくありませんよお…」

俺達はそんなやり取りをしてから、車を発進させた。

765号を萩原家へ向かわせ、順調に走行していた途中、雪歩が突然暗い口調で話し始めた。

「あのお…プロデューサー」

「うん？ どうした雪歩」

「先ほどは小鳥さんが居たので言い出せませんでした、よく考えてみたら、この姿をお父さんに見せたら…どう思われるのか…とても不安で…」

雪歩の言葉を聞いて俺はハッとした。

雪歩の言う通りだ。こんなにチビっこくなってしまう雪歩を見たら、どう思うか…。俺だってロリ雪歩と初対面の時は、別人のように思っていたし、気付いたとしてもこんな身体にされたと知ったらきつと悲しむに違いない…。

「お父さんがこのことを知ったら、アイドルなんかやってるからこんな目に遭うんだ！ 今すぐアイドルなんか辞めるんだ！ とか言うに決まっていますう…。そうなたらプロデューサーと会えなくなってしまうって…。くすん…。私、そんなのイヤですよぉ」

「雪歩…」

雪歩はいつものように、クスンクスンと泣き出してしまった…。俺は彼女のプロデューサーなのだから、なんとかしないと…。要は雪歩とお父さんを会わせなければ問題ないんだろ？

……。

それってつまり…。そ、そんなことをしたら…。いや、でも…。この状況を理解しろと言う方が、無理なこともかもしれない…。うくむ、一応雪歩に聞いてみるか。

「なあ、雪歩。もしもだよ？」

「はい？」

「俺が進路変更して、このままお前をさらって逃げるって言ったら…。どうする？」

「えっ…。それって…」

さすがは勘のいい雪歩だ。俺の言わんとすることを察

知したようで、顔を真っ赤にして俯く。

「はい……。プロデューサーがそうしたいのなら……。私は……。プロデューサーの決定に従いますう……」

「そっか。よし、わかった。じゃあ、今日家に帰れない理由を親御さんに伝えないとな」

「はい！ それなら学校のお友達の家でお泊まり会をすることになったって、お母さんに言えば、なんとかなるかも！」

雪歩はそう言って早速ケータイで自宅に連絡する。なんか、雪歩にウソをつかせて悪いことをさせているみたいで、少し良心が痛むが、『嘘も方便』と言うしなあ……。

雪歩が元に戻るまでのことなので、どうか大目に見てくれ、頼む！ と俺は心の中だけで祈りながら、車のハンドルを切って、進路を自宅アパートへと変更した。

「プロデューサー、全て上手くいきました！」

雪歩はケータイをパタッと二つ折りにたたみながら、俺にそう言った。

「随分嬉しそうじゃないか。これから俺にさらわれると

言うのに「

「ふふっ、だって…今日は一晩中プロデューサーと一緒にいられるって思うと…嬉しくって…」

「UFOの時は一晩中どころか、ずっと一緒にいたけど。そうか、あれ以来になるのか…」

「プロデューサーの家、楽しみですよ…」

765号は夜道を走行し、俺の自宅アパートを目指した。

（本作は『体験版』なので、第一章と第四章のみの収録となります。続きが気になる方は『製品版』のご購入をよろしくお願致します）

## ■第四章

お風呂から上がった俺と雪歩は、バスタオルでよく身体を拭いてから、寝間着（寝間着と言っても雪歩のは『ブルマ』なのだ）に着替えて部屋に戻った。そしてまた、雪歩が入れてくれたお茶を飲む。湯上がりにもお茶が良いようだ。

さて、エッチをするためにお風呂に入ったワケだが、エッチはお風呂で済ませてしまった。まだ、寝るには早い時間だし、何をしようかな？ 雪歩もさっきから黙ってお茶を飲んでいるだけだし…。やっぱり、ここはプロデューサーである俺の方から何か話題を振らないとな。

22

アイドル雪歩のちっちゃいアイドルクエスト！体験版

「なあ、雪歩。テレビでも観るか？ リモコンはそこにあるから、好きな番組を観ても良いぞ」

「はい、そうですね。リモコンはどこですか？」

「ほら、パソコン机の上に…」

「えっと、リモコン…リモコン…。あつ、なんだろ？ この可愛い…」

ん？ 可愛い？

テレビのリモコンって、そんなに可愛かったっけ？

それとも最近の子の感覚だと「このミュートボタン、超かわいい！」とか、たまにしか使われない『不遇なボタン萌え』みたいなものがあるのか？ 俺は不思議に思っ、雪歩に背後から近づき、持っているモノをよく見てみる。

「ぶっ!! そ、それは…っ!」

「兄妹…同棲って、タイトルみたいですね…。この『エッチ』なゲーム…」

そう、雪歩が発見してしまったモノは、テレビのリモコンでも、超可愛いミュートボタンでもなく、『兄妹同棲』という名前のエッチなPC用ゲームソフト。通称『エロゲー』であった！

23

しまった！

さっきエロいモノは全て押し入れに隠したつもりになっていたのだが、まだ1本だけ残っていたとはっ！

不覚っ！

うわ、雪歩ったらエロゲーのパッケージを黙ってあんなに凝視して…。気のせいかな、雪歩の周りに『ゴゴゴゴゴゴゴ…』という書き文字が見える…。怒ってるのかな？ それともエロゲーのイラストが気になって見入っている？ いや、それはないな。どっかの有名ニュースサイトの名前を書いて、爆売れしたライトノベルぐらい

ありえない。うぐぐ…どうしよう？　ここは笑って誤魔化すか？　それともツンデレ風に『男なんだから、エロゲーの1本や2本持っていて、当たり前なんだからねっ！』で乗り切るか？　はたまた『漢、土下座地獄！』で、有無を言わせぬ惨めさを演出するか…。

雪歩の肩が小刻みに震え始めた。怒りに打ち震えているのか？　と、とにかく何かを言わないと…。

■ 雪歩 ■

私というものがあひながら、こんなエッチなゲームをするなんて…。プロデューサーはきつと、この女の子のエッチな画像と卑猥な文章を読みながら、一人エッチを…。それはつまり、この女の子に欲情したっていうこと…。プロデューサーが私以外の女の子に欲情したっていうこと…。私は心の中に沸々とどす黒い感情が生まれ始める。

（待って！　ヨハネ・クラウザー・雪歩！　その感情は破滅しか生み出さないわ！）

そう言うのは天使セットを身につけた私の頭の中で囁



くもう一人の私。『てんしーゆきぽ』であった。

（止めないで！ てんしーゆきぽ！ プロデューサーの恋人はこの世に1人しかいないの！ それが誰かっていうことを肉体に刻み込んで、忘れないようにするだけなんだから！ 具体的に言うとなんとなくとプロデューサーの尿道に、電動ドリルのドリル刃を差し込んで、トリガーを引くフリをするだけだから心配しないで！）

（そんなことしたらダメダメですう！ なんて恐ろしいことを考えているの！ まるで春香ちゃんみたいなことを…。何よりもプロデューサーを傷付けることは絶対に許しませーんっ！）

（じゃあ、今日から毎晩枕元で1秒間に10回「大勝利！」発言にしましょうか。睡眠学習効果で私のことが忘れられなく…）

（プロデューサーの精神に異常をきたしてしまえますう！）

（それじゃあ、東京タワーを…）

（レイプ済みですう！）

（じゃあ、どうしろって言うのよ!? まさかいつもみたいに泣き埋まりするつもり？）

泣き埋まりって言うのは「泣き寝入り」みたいなものだろうか？

（私だって泣き埋まりする気はないわっ！　今こそ童話に学ぶ時なのよ、クラウザー雪歩！）

（童話って、ウナギとカメ？）

（それは最初のコミュでしょ！　しかも選択肢を間違えてますう！　そうじゃなくて『北風と太陽』の方ですう！）

（『北風と太陽』？　ああ、あの旅人のコートを先に脱がせた方が勝ちっていうお話ね）

（いい？　あなたの案は全て北風なの。そんなことばかりしては、人は余計意固地になって、コートを手放さなくなるんですう）

（大丈夫よ。私がキチツとM調教して、露出の喜びに目覚めさせてあげるから！）

（私のプロデューサーをこれ以上、変態紳士にしないで欲しいですう！）

あまりに酷いことを言うので、本気でツツコミを入れてしまおうんしーゆきぽ。

（そんなことをしなくても、プロデューサーを振り向かせる方法があるんですう！）

（その方法とは？）

（『目には目を！　妹には妹を！作戦』ですう！）

『目には目を！ 妹には妹を！作戦』？)

オウム返しして聞き返すクラウド・雪歩。

(そうですね！ プロデューサーが持っているこの『兄妹同棲』は妹のキャラクターが出てくるゲーム。つまり、プロデューサーは妹キャラが好き…ということ、私も妹キャラクターになれば、プロデューサーの心をがっちりキャッチ&リリースできる、というワケなんです！)(とりあえずリリースしちゃダメだけど、今までの案の中では1番良さそうね)

(幸い今の私は、小鳥さんの薬のおかげでロリ化していてこのゲームのヒロイン、雪音ちゃんそっくりになってます！)

(名前も1字違いだし、白いワンピースを着ているところまで似ているなんて、ちょっととしたディステイニー(運命)だしね！)

(はいです！ やっとわかってくれましたか、ヨハネ・クラウド・雪歩！)

(よくよく考えてみたら、私の案ではみんな『Nice boat.』な結末を迎えてしまいそうだしね。今回はあなたに譲るわ)

(じゃあ、そろそろ元に戻りましょうか)

(ええ！)

(だって、私達みんな！)  
(仲間だもんげ!!)

■ 茅野 P ■

「お兄ちゃんが大切にしているゲームを、雪歩が勝手に観たらダメダメだね。ゴメンなさい、お兄ちゃん…」

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！

『俺が声をかけようとした次の瞬間、雪歩の方から俺のことを「お兄ちゃん」と言って話しかけてきた』

な…何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…。頭がどうにかなりそうだった…。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

「おい、雪歩！ 大丈夫か!? ロリ化してどこかおかしくなってしまったのか!？」

俺は雪歩の両肩を掴んで揺さぶったり、自分のヒタイと雪歩のヒタイの体温を比べてみたりして、雪歩の体調を心配した。変な薬を飲まされているのだから「頭」が

おかしくなる可能性もゼロではないハズだ。

「だ、大丈夫ですう！ 私の頭がおかしくなったんじゃありませんんっ！ これは『兄妹ごっこ』ですう！」

「兄妹ごっこ？」

「そうですう！ 小鳥さんの薬で小さくなったことですし、プロデューサーが妹キャラクターのゲームが好きと知れば、もう私がプロデューサーの妹になるしかないですう！」

うむ、別に妹キャラだけが好きってワケじゃないが、雪歩の機嫌も直ったみたいだし、ここは話を合わせておくか…。

29

「よし、受けて立とうじゃないか雪歩！」

「はいっ！」

まあ、そんなこんあでテレビを観ることなどすっかり忘れて、『兄妹ごっこ』を始めることになった。

「ところでお兄ちゃん。兄妹って普段どんなことをするの？」

おお、なかなか上手いじゃないか雪歩。これはドラマ

とかの練習になるかもしれないな。

「そうだなあ。とりあえず仲の良い兄妹なら『ひざまくらで耳かき』ぐらいはしているに違いない。っていうかやりたい。やろう！」

「相変わらず己の欲望に正直だね、お兄ちゃんは…。でも、お兄ちゃんがやりたいって言うなら、いいよ…」

雪歩はそう言うと、頬を少しピンクに染めて、コクリと小さく頷いた。雪歩が同意するのを確認すると、俺は光の速さでPCデスクの上にあるペン立ての中から白いフワフワ「梵天」の付いた耳かき棒をつかみ取り、雪歩に手渡す。ロリ雪歩は少し困った顔をしながら座布団の上で正座になる。俺はすかさず頭を雪歩のスベスベで温かい太ももの上に乗せて「ひざまくら」をする。

「オウ！　これがジャパニーズひざピロー!?　とってもプニプニでえす！」

「お、お兄ちゃん!?　なんだかいつもと違うよ!?!」

「おっと、これは失礼。つい興奮しすぎて我を見失っていたよ。それにしても湯上がり雪歩って良いにおいだな。もう少しじっくりと匂いをかがせてくれよ」

そう言うと俺は、横にしていた頭を起こして、顔の方

が雪歩の太ももとブルマがある方向へ、体勢を変更する。

「あんっ、やっ…ダメだよお兄ちゃん！ そんなところの匂いかいだら…恥ずかしいよお…」

「スンッスンッスンッ…。湯上がりで蒸れ蒸れになった雪歩のブルマンコは…スンッスンッスンッ…。良い匂い過ぎだろJK！ 頭ん中、真っ白になるくらい気持ちいいよ、雪歩…」

「もうっ、お兄ちゃんったら、甘えんぼさんなんだからあ…」

「雪歩がイケナイんだぞ。こんなエロい格好して『ひざまくらしよっ！』とか言っって誘ってきたんだから…」

「ち、違うよっ！ お兄ちゃんが…仲の良い兄妹だったらひざまくらぐらいするだろうって…あんっ！」

「ブルマンコ深呼吸は…すーはーっ！ すーはーっ！ 結構クセになるなっ！ すーはーっ！ これはいつか…エリンピックの競技の1つになるかもしれんっ！ すーはーっ！」

俺はそう言っってロリ雪歩のブルマに顔面を密着させ、そこで思いつき深呼吸をした。雪歩の女の子特有な甘い匂いが、俺の鼻腔を通して、胸一杯に貯まる。エッチな匂いが脳を刺激し、俺の欲棒がビクビクと反応する。

「ならないし、流行らないよお！あと、中村さんが聞いたらきつと怒ると思うよ、お兄ちゃん！」

「72い!? さっきから妹のクセに生意気だぞ雪歩。おしおきしてやるっ！」

俺は雪歩のブルマの上から、ぶくつと少しだけ勃起しているクリトリスを、前歯で軽く甘噛みする。

「ああんっ♥ やっ！ダメだよ、お兄ちゃん！お風呂に入ったのに…また濡れて汚れちゃうよおっ！」

「お風呂くらい、また入ればいいよ」

「そうじゃ…なくて…。この体操着は…1着しか…ないから…んんっ…明日の服が無くなっちゃいますう…」

「そっか…。じゃあ、明日は1日中、全裸で暮らせば…いいんじゃないか…。じゆるるるるっ!!」

「あんっ…ああんっ♥ お、オマンコ！吸ったらっ！ああっ!!」

俺はそう意地悪なことを言って、雪歩のブルマのクロツチをパンティーごとズラして、露出したムダ毛1本生えていないツルツル薄ピンクオマンコを、バキュームクンニする。ワザとエロい音をさせて吸ってやるのが、雪歩が気持ち良くなるポイントだ。



「もう…そんなにエッチな音をさせて…オマンコペろペろするから…またスイッチが入っちゃいましたよお…。オマンコしてください、プロデューサー♥」

「あれ？ お兄ちゃんじゃなかったの？ それに兄妹でセックスするのは、イケないことなんだぞ？ 雪歩」

「うう…、私が小さくなっても、プロデューサーは相変わらず意地悪ですう！」

「悪いな。雪歩の泣き顔を見ないと、俺のチンコは勃起しないんだ…」

「酷い設定なおちんちんですう！」

「ウソだよ。でも、通常時より元気になるのは本当だ」

俺はそう言ってから起き上がって、寝間着を脱ぎ、ベツドに上がる。

「ほら、おいで雪歩。いっぱい愛してやる」

「は、はいっ！」

俺がエッチの許しを出すと、雪歩の顔がパアツと明るくなり、大喜びで俺の膝の上に乗ってきた。そして、雪歩のビチヨビチヨに濡れた愛液をすくい取って、俺の肉棒に塗りたいくってから、今度は背面座位で繋がった。





「んっ…んんっ…んうゝっ！ あはっ…今回はすんなり挿っちゃったね。お兄ちゃん」

「まだ兄妹ごっこは続いてたんだな…。まあ、いいか。背徳感があつて…」

「そうだよ、お兄ちゃん。兄妹なのに…こんなに歳が離れているのに…セックスしちゃってるんだよ雪歩達っ！ あんっ♥ ああ！ こんなのエッチ過ぎだよ、お兄ちゃん！」

「ああ、そうだな…。こんなにエッチな妹と…セックスできて…俺は幸せだよ…」

「あっ…あんっ！ 雪歩も！ 雪歩もお兄ちゃんと…セックスできて…幸せだよ♥ お兄ちゃん!! ああんっ！」

俺達はそう言うてからお互いに唇を寄せ合つてキスをした。上も下も繋がつての兄妹セックス。俺の興奮度が上がつて、次第に身体を揺さぶるスピードが上がつていく。それにともない雪歩の身体がガクガクと上下に揺れるスピードも上がる。

「雪歩のロリマンコ…相変わらずキツキツだな…くっ！俺のモノをキュウキュウ締め付けてきて…すっごく気持ちいいっ！」

「お兄ちゃんっ♥ あっ…ああんっ♥ 雪歩っ！ 雪歩

ねっ！ ちっちゃくなってるから…いつもより…エッチな気分になってるのっ♡ あんっ！ お兄ちゃんの…精液っ！ 雪歩の子宮にっ…いっぱいかけて欲しくてえ…堪らなくなってるんだよっ♡」

「ああ！ 待ってるよ…もうすぐ雪歩の望み通りに…してやるからなっ！」

「雪歩っ！ お兄ちゃんの妹なのにつ！ お兄ちゃんのモノになりたいっ♡ お兄ちゃんの精子…子宮にいっぱいドピュドピュされて♡ 雪歩の全部を…お兄ちゃん専用にしたんだよ！！」

「雪歩！ 雪歩！！ お前のオマンコ…絡みついできて…たまんねえ！ お前は…俺のモノだ！ お前の全部は…ずっと俺のモノだ！ 絶対に手放すもんかっ！！」

「嬉しいっ！ 嬉しいよお兄ちゃんっ♡ イこうっ！ 一緒にイってえ…いっぱい気持ち良くなってっ！ お兄ちゃんっ！！」

「ああ！ イクぞっ、雪歩っ！ 今、いっぱい注いでやるからなっ！ そのちっちゃい子宮で…全部受け取れ！ 雪歩！」

ビュッ！ びゅるるるっ！！ びゅるるるるるるっ！  
ビュッ、ビュッ！

俺は雪歩を力一杯抱きしめ、猛然とした腰使いでピス

トン運動を繰り返し、雪歩と繋がったまま絶頂した。俺の亀頭は雪歩の子宮口とディープキスしながら、その先端から白濁とした精液が勢いよく吐き出される。今頃、その白濁液は雪歩の小さな子宮内をアツという間に満たし、卵管を通して、卵子が待ち構える卵巣をも、すぐに満たしてしまっているに違いない…。

「はあ…はあ…ふ、ふろでゅーさー…。とっても…気持ち…よかったです♡ 精液、いっぱい…中にくれてえ…ありがとうございます…」

すっかりアクメ顔で、締まりのない表情の雪歩は、乱れた呼吸を整えながら、俺に感謝の言葉を言う。

「俺の方こそ…いつも気持ち良くしてくれて…ありがとう、雪歩…」

俺も雪歩にお礼を言ってから、繋がったままキスをする。いったばかりだったからか、俺達の全身が敏感になっていて、キスをするだけでも性感を覚え、繋がったままの俺の肉棒もビクビクツツと反応し、雪歩が「あん♡」と可愛い嬌声を上げた。

その晩、俺達はいつも盛り上がり、あと3回中出

しセックスをしてから、ヤリ疲れて眠った…。

（本作は『体験版』なので、第一章と第四章のみの収録となります。続きが気になる方は『製品版』のご購入を  
よろしくお願い致します）

アイドル雪歩のちっちゃいアイドルクエスト！体験版

■ 奥付 ■

『アイドル雪歩のちっちゃいアイドルクエスト！体験版』

著者 / 妹尾拓（せのお たく）

挿絵・CG 彩色 / もふ

発行 / ふろーらいと

URL / <http://fluorite.dojin.com/>

発行日 / 2009年7月20日

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。